

マイコトキシンのポストハーベスト汚染リスクとその低減化

1 中核機関・研究総括者
信州大学 後藤 哲久

2 研究期間
2005～2008 年度（4 年間）

3 研究目的

国際的に、農産物の安全性を向上するには各種かび毒（マイコトキシン）による、その汚染を低減・防止することが求められている。その中で、国内において収穫後における農産物の汚染が懸念される、パツリン、オクラトキシン A、ステリグマトシスチンについて、その産生菌、トキシン産生の実態を知り、汚染の防止を図る。

4 研究内容及び実施体制

① マイコトキシン産生菌の分布に関する研究

（（独）食品総合研究所、信州大学）

圃場、倉庫周辺土壌からのパツリン、オクラトキシン A、ステリグマトシスチン産生菌の分離を行い、その分布、トキシン産生能を検討する。

② パツリン汚染の低減化法の検討

（（社）長野県農村工業研究所、長野県工業技術総合センター、信州大学）
リンゴ製品のパツリン汚染防止、低減化技術を開発する。

③ オクラトキシン A 及びステリグマトシスチンによる加害の防止法の検討

（（社）長野県農村工業研究所、（独）食品総合研究所、信州大学）
米の貯蔵中の産生菌の挙動を検討し、汚染防止のための管理点を明らかにする。

5 目標とする成果

1. 国内土壌における、パツリン、オクラトキシン、ステリグマトシスチン産生菌の分布実態を確認する。
2. リンゴ製品のパツリン汚染低減化のための方策を明らかにする。
3. 米の貯蔵中におけるオクラトキシン A、ステリグマトシスチン産生菌の挙動の一端を明らかにし、貯蔵穀類のマイコトキシン汚染防止の方法を示す。

マイコトキシンのポストハーベスト汚染リスクとその低減化

